

東京 IPO 特別コラム

2024年10月10日 Vol.230

東京地下鉄のIPOが接近

猛暑の夏を乗り越え、季節は秋の風情を強めています。石破新総裁誕生で今月27日には衆院選の開票が予定され政局の先行き不透明な状況下ではありますが、株式相場は米国経済のソフトランディング期待、再びの円安基調から日経平均が3万9000円台に戻るなど比較的底堅い展開が見られます。秋相場の話は様々ですが、IPO市場では久しぶりに大型IPOとなる東京地下鉄（9023・公開株数2億9050万株）に関心が集まりつつあります。

今年は2月から56銘柄がIPO。公開初値割れはともかく公開価格すら下回る銘柄が多く、海外投資家主体の展開の中で多くの投資家の関心はプライム市場の半導体関連銘柄やAI関連、防衛関連銘柄などに偏重した状況となっています。

こうした状況下で10月は1日にシマダヤ（250A・食品・めん類など製造販売）がスタンダード市場に上場。公開価格1880円に対して初値1760円（▲6.4%）、高値1840円（10月1日）、安値1509円（10月10日）と推移。異業種のメルコHD子会社でスピンオフ上場として話題を集めていましたが上場後はやや不人気の状況。食品企業で消費者の認知度は比較的高く、業績自体は安定していますが、今期は1Q業績こそ営業利益の進捗率が通期見通しに対して39%と高いものの通期減益見通しで成長性に対する否定的な見方から今期予想PER11倍台、PBR1.4倍台、配当利回り2.6%（10日現在）で評価されており、上場後は公開価格を上回ることなく株価が推移しています。

シマダヤに限らず、多くの直近IPO銘柄が現在、蚊帳の外状態にあります。市場の関心は既に23日にプライム市場に上場する東京地下鉄（東京メトロ）（公開株価仮条件1100円～1200円で上場時推定時価総額8000億円・主幹事は野村証券）に移行しています。優待制度と高配当狙いの投資家には魅力的で同社株には地下鉄を利用される都内通勤者を中心に申し込みされる方が多いかと思われ、このところメディアで様々に盛んに取り上げられているため関心が高まっています。事業内容は周知の通りで、都内で9路線の地下鉄を運営しているほか、他の私鉄企業と同様に駅構内での店舗、流通施設の運営、不動産事業も展開しています。3月期決算で今期の業績はインバウンド需要もあり、売上高4075億円（前期比+4.7%）、営業利益880億円（同+15.2%）、EBITDA1594億円（同+6.2%）、経常利益767億円（同+16.4%）、当期利益523億円（同+13.1%）と2桁台の利益成長見通し。EPSは90円、一株配当金は40円の見通し。1Q決算実績は売上高1019.5億円、営業利益290.97億円（通期見通しに対しての進捗率は33%）、経常利益262.9億円（同34%）、当期利益180.6億円（同34.5%）、EPS31.09円で通期予想業績は余裕含み。想定公開株価1100円から1200円はPER12倍～13倍、配当利回り3.3%から3.6%で比較的割安感も感じられます。優待制度も加味すると個人の短期投資家だけでなく中長期投資家においても人気は高いと言えます。放出株は多いためキャピタルゲイン狙いというよりはインカムゲイン狙いのチャンスがあるのではないかと推察されます。

（東京IPOコラムニスト 松尾範久）